

金子量重コレクション衣分野の調査研究

— 見ることのカへアプローチする実物資料 —

Research and study of Kazushige Kaneko Collection of Clothing field
— Approach to the power of seeing Real materials —

大網 美代子¹, 土居 千夏¹, 児玉 育子¹, 原田 美香²
Miyoko Oami¹, Chinatsu Doi¹, Ikuko Kodama¹, and Mika Harada²

¹大妻女子大学, ²特定非営利活動法人日本ガルテン協会

キーワード: アジア, 民族服, 金子量重

Key words: Asia, National clothing, Kazushige Kaneko

1. 研究目的

本学創立者である大妻コタカ先生の実技実学は、現在でも変わることはない本質である。本学の不易流行の実現が研究代表者の大きなテーマである。被服学科の実技教育では、経験不足による技術の低下に加え、近年では衣服の構造の理解など様々な困難が挙げられる。実物資料を観察すること、気づくこと・自覚することは重要なことである。

本研究はアジア民俗学者である金子量重コレクションの衣分野資料である。金子量重氏はアジア民俗学者で、研究テーマは人類が生み出した「衣、食、住、祈り」にくられる「民族造形」という概念を「物」に即して実証的に証明することであった。アジアの民族の衣食住、祈りと信仰、芸能と音楽の分野を網羅して研究をされた第一人者である。本研究資料は、金子氏との縁があり、本学に103点ほどの衣服や帽子を寄贈していただいたものである。

本資料は「見ることのちから」を養う教育的資料になると考える。現在、研究代表者の管轄場所に保管をしているが、博物館に収めるにあたり、資料の調査研究を行う。関係書籍および聞き取り調査を行い、その衣服の構成・装飾の特徴を明らかにし、さらに着装美や生活文化を合わせて考察を行う。

2. 研究実施内容

本研究はアジア民俗学者である金子量重コレクションの衣分野資料の中、寄贈された103点の調査研究を行う。また、衣服の構成・装飾の特徴を

明らかにし、さらに着装美や生活文化を合わせて考察を行う。資料には会符があり地域はほとんどが判明している。既に、第1段階の調査として写真の記録とリストは整っている。

今回の資料撮影では、衣服は平置きの平面（前面・背面）と人体に装着させた立体で記録をとり、造形的な特徴を明らかにし、資料台帳を整える。その項目は資料名・別称、分類、国名、地域、民族・部族、年代、材料、技法、装飾文様、構造、寸法、備考とした。調査後に解説を加える。表1は地域別資料リストである。イラン1点、インドネシア6点、タイ11点、ベトナム64点、ミャンマー7点、モンゴル2点、ラオス6点、チベット2点、トルコ1点、他3点の計103点である。

紙面の関係で、2点について説明をする。図1タイのズボン（表13-1）について、材料は木綿を使用しズボンは3枚の布からなり、パイアスの襠の取り方が特徴である。装飾技法の刺繍はクロスステッチとヤオ刺し（中央から上下左右に4針刺す手法）を使い、日常生活の風景をモチーフにしている。図2ベトナム・モン族のスカート（表14-47）は、腰に巻いてウエストを2本の紐で縛るプリーツの入った構造である。スカートは3段の布からなり、1段目は藍色無地の布で2段目はろうけつ染めの広幅の藍布に、3段目は無地や花柄の布に刺繍やアップリケの装飾が施されている。スカートの裾は黒か濃紺の細長い布で仕上げる。1段目は100本のプリーツ、2本目は200本のプリーツからなる。プリーツの本数が2倍になるためスカート裾はたっぷりと仕上がる。

表1 金子コレクション 地域別リスト

	地域	資料内容		地域	資料内容		地域	資料内容
1-1	イモン	フード	4-17	ベトナム・ブオ族	前掛け	4-51	ベトナム・モン族	上衣 女児
2-1	インドネシア	布	4-18	ベトナム・ブオ族	鈴飾り布	4-52	ベトナム・モン族	上衣 男性
2-2	インドネシア	布 サロン	4-19	ベトナム・ブオ族	鈴飾り布	4-53	ベトナム・モン族	上衣 男性
2-3	インドネシア	布	4-20	ベトナム・ブオ族	飾り頭布	4-54	ベトナム・モン族	下衣・ズボン
2-4	インドネシア	肩掛け	4-21	ベトナム・フア族	刺繍布袋	4-55	ベトナム・モン族	帽子
2-5	インドネシア	帯	4-22	ベトナム・ジャロイ族	夜具地	4-56	ベトナム・モン族	上衣
2-6	インドネシア	肩掛け	4-23	ベトナム・ジャロイ族	フンドシ	4-57	ベトナム・モン族	スカート
3-1	タイ	下衣・ズボン	4-24	ベトナム・ジャロイ族	上衣	4-58	ベトナム・モン族	帽子 女児
3-2	タイ	反物	4-25	ベトナム・タイ族	肩掛け	4-59	ベトナム・モン族	帽子
3-3	タイ・アカ族	帽子	4-26	ベトナム・タイ族	スカート	4-60	ベトナム・モン族	スカート
3-4	タイ・アカ族	ベルト(メーサイ)	4-27	ベトナム・タイ族	上衣	4-61	ベトナム・ルアン族	刺繍布
3-5	タイ・アカ族	ベルト	4-28	ベトナム・タイ族	ベルト	4-62	ベトナム・ロロ族	下衣・ズボン
3-6	タイ・アカ族	上衣	4-29	ベトナム・タイ族	上衣	4-63	ベトナム・ワイブオ族	頭布
3-7	タイ・メオ族	上衣	4-30	ベトナム・タイ族	肩掛け	4-64	ベトナム・ワイブオ族	上衣
3-8	タイ・メオ族	スカート	4-31	ベトナム・タイ族	帯 紋織	5-1	ミャンマー	馬車文 刺繍布
3-9	タイ・ヤオ族	下衣・ズボン	4-32	ベトナム・タイ族	帯 紋織	5-2	ミャンマー	仏像文 刺繍布
3-10	タイ・ヤオ族	上衣	4-33	ベトナム・タイ族	上衣	5-3	ミャンマー	刺繍布
3-11	タイ・ヤオ族	上衣	4-34	ベトナム・タイ族	肩掛け	5-4	ミャンマー	模衣・スカート
4-1	ベトナム	布 6枚	4-35	ベトナム・タイ族	上衣	5-5	ミャンマー	下衣・ズボン
4-2	ベトナム	ベルト	4-36	ベトナム・タイ族	胸あて	5-6	ミャンマー	上衣
4-3	ベトナム	帽子	4-37	ベトナム・タイ族	帯	5-7	ミャンマー・モカイン族	布
4-4	ベトナム	アオザイ 男性	4-38	ベトナム・タイ族	帯	6-1	モンゴル	ベルト布
4-5	ベトナム・エテ族	上衣	4-39	ベトナム・タイ族	襪巻	6-2	モンゴル	長衣 男性
4-6	ベトナム・エテ族	布	4-40	ベトナム・タイ族	スカート	7-1	ロシア	女性衣服 肩掛け
4-7	ベトナム・エテ族	肩掛け	4-41	ベトナム・タイ族	夜具地	7-2	ロシア	上衣
4-8	ベトナム・エテ族	上衣	4-42	ベトナム・パナー族	上衣	7-3	ロシア	スカート
4-9	ベトナム・エテ族	下衣・ズボン	4-43	ベトナム・パナー族	スカート	7-4	ロシア・チチ族	肩掛け
4-10	ベトナム・クエン	下衣・白ズボン	4-44	ベトナム・フラー族	スカート	7-5	ロシア・チチ族	スカート
4-11	ベトナム・ブオ族	上衣	4-45	ベトナム・フラー族	上衣	7-6	ロシア・チチ族	上衣
4-12	ベトナム・ブオ族	夜具地	4-46	ベトナム・モン族	襪布	8-1	チベット	
4-13	ベトナム・ブオ族	長衣	4-47	ベトナム・モン族	スカート	8-2	チベット	コート
4-14	ベトナム・ブオ族	上衣 女児	4-48	ベトナム・モン族	絹糸(野蚕)	9	トルコ	コートワンピース
4-15	ベトナム・ブオ族	下衣・ズボン	4-49	ベトナム・モン族	絹糸 白	10-1		帽子
4-16	ベトナム・ブオ族	帽子	4-50	ベトナム・モン族	絹糸(野蚕)	10-2		靴
						10-3		帽子



図1 表1 3-1 タイ・ヤオ族 ズボン



図2 表1 4-47 ベトナム・モン族 スカート

3. まとめと今後の課題

民族服の文様は着ている人の身分や立場、所属やアイデンティティ、魔除けや幸せを願う気持ち、神仏への祈りなど人が生きていく営みの中で意識されるさまざまなことが表現されている。それぞれの国や地域、民族の歴史に育まれた生活文化といえよう。また、服飾研究は衣服である「モノ」と通して行われ、人が着装することで完成し、人のかかわりの中でその服装美は成立している。

植物、動物、自然、器物、物語など生活に根差した文様を分類し、その意味を考察することで先人たちが育んできた知恵や豊かな心が伝わってくる。民族服を縫う、刺す、接ぐ、繡るなどの手仕事は、国を超え、時を超え、アジアの人々の暮らしを潤し、人の心を温めてきた。

今後は特徴的な衣服について、サンプルの試作を行い民族服の構造を検証する。また、装飾については、刺繡などを通して糸と針の手仕事を検証する。本研究資料は衣の分野であるが、食・住など文化として視野を広げて研究を発展させることも可能であると考え。アジア文化の研究、教育、技術の伝承、生活デザインなど、いろいろな分野への活用も検証していきたい。

本研究資料は「見ることのちから」を養う教育的資料になると考える。教育現場でも実物資料か

ら学ぶことは多いが、現在の学生たちは物心ついた頃からインターネットが身近にあり、多くの情報に取り囲まれている。このことが学生たちに情報の自主的な取捨選択を無意識にさせ、女子大生の独自の感性を育んでいられる。一方で、実物資料に触れる機会が少なくなっているのが現状である。つまり、見ることの機会の減少は、感じる、気づく、考える、自覚することの機会の減少とも言える。被服学科の実技教育では、経験不足による技術の低下に加え、近年では、衣服の構造の理解など様々な困難が挙げられる。ものを製作する上で、見る、気づく、自覚することは重要なことである。それらは、すべての学びに共通する姿勢である。つまり、インターネットの利点と実物資料による双方の情報があつてこそ、その時代とものの本質を理解することができる。と考える。

今後は大妻女子大学博物館と連携をして、企画、テーマ設定を検討して展示を行い、「見ることのちから」の検証をしていきたい。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1] 大妻女子大学家政系研究紀要—第 57 号掲載予定